

Contes Fantastiques Français du 19^e Siècle:
Jean Lorrain et d'autres.



紀田順一郎 荒俣宏

責任編集

世界幻想文学大系 ③1 A

G・ド・ネルヴァル

French: Gérard de Nerval

上 藤田知和基 訳



国書刊行会

世界幻想文学大系……責任編集 紀田順一郎・荒俣宏
第三十一巻A

東方の旅——上

昭和五九年一月二五日印刷 昭和五九年一月三〇日初版第一刷発行

著者——G・ド・ネルヴァル

訳者——篠田知和基

発行者——佐藤今朝夫

発行所——株式会社国書刊行会

東京都豊島区巢鴨三—五—一八 郵便番号一七〇 電話〇三—九一七—八二八七 振替東京五—六五二〇九

造本者——杉浦康平・鈴木一誌 協力 佐藤篤司

挿画——渡辺富士雄

印刷所——凸版印刷株式会社・セイユウ写真印刷株式会社

製本所——凸版印刷株式会社

定価——三、二〇〇円

●——落し本・乱丁本はおとりかえします

篠田知和基のちわき

一九四三年、東京都生れ。

東京教育大学卒業。

現在、名古屋大学助教授。

専攻、仏文学・比較文学。

主要著訳書——

『幻影の城』思潮社、一九七二年。

『ネルヴァルの生涯と作品』牧神社、一九七七年。

『城と眩暈』(共著)国書刊行会、一九八二年。

『ジャン・レール』マルベルチュイ『月刊ペン社、一九七九年。

『ジャン・ロラン』フォカス氏『月刊ペン社、一九八一年。

『オクターヴ・ミルボー』『責苦の庭』国書刊行会、近刊。

世界幻想文学大系第三十一卷A

東方の旅——上 G・ド・ネルヴァル——篠田知和基〓訳



目次

11 — 東方の旅 — 上

13 — ある友への序章 — 東方へ

14 — I — ジュネーヴ街道

20 — II — 駆けだし外交官

25 — III — スイス風景

31 — IV — コンスタンツ湖

38 — V — ミンヘンの一日

47 — VI — ウィーンの恋

54 — VII — 日記(つづき)

60 — VIII — 日記(つづき)

67 — IX — 日記(つづき)

77 — X — 日記(つづき)

82 — XI — アドリア海

85———Ⅺ—多島海

88———Ⅻ—ウエヌスのミサ

90———Ⅻ—ポリフィリスの夢

94———ⅩV—サン＝ニコロ港

96———ⅩV—アブルノリ

99———ⅩⅦ—パレオカストロ

101———ⅩⅧ—三格のウエヌス

104———ⅩⅨ—キクラデス諸島

108———ⅩⅩ—聖ゲオルギス教会

112———ⅩⅢ—シラの風車

119———カイロの女

120———第一部—コプト式結婚

120———Ⅰ—仮面とヴェール

125———Ⅱ—松明と婚礼

131———Ⅲ—通訳アブダラ

138———Ⅳ—独身者の問題

144———Ⅴ—ムースキー

148———Ⅵ—ベセスタインの冒険

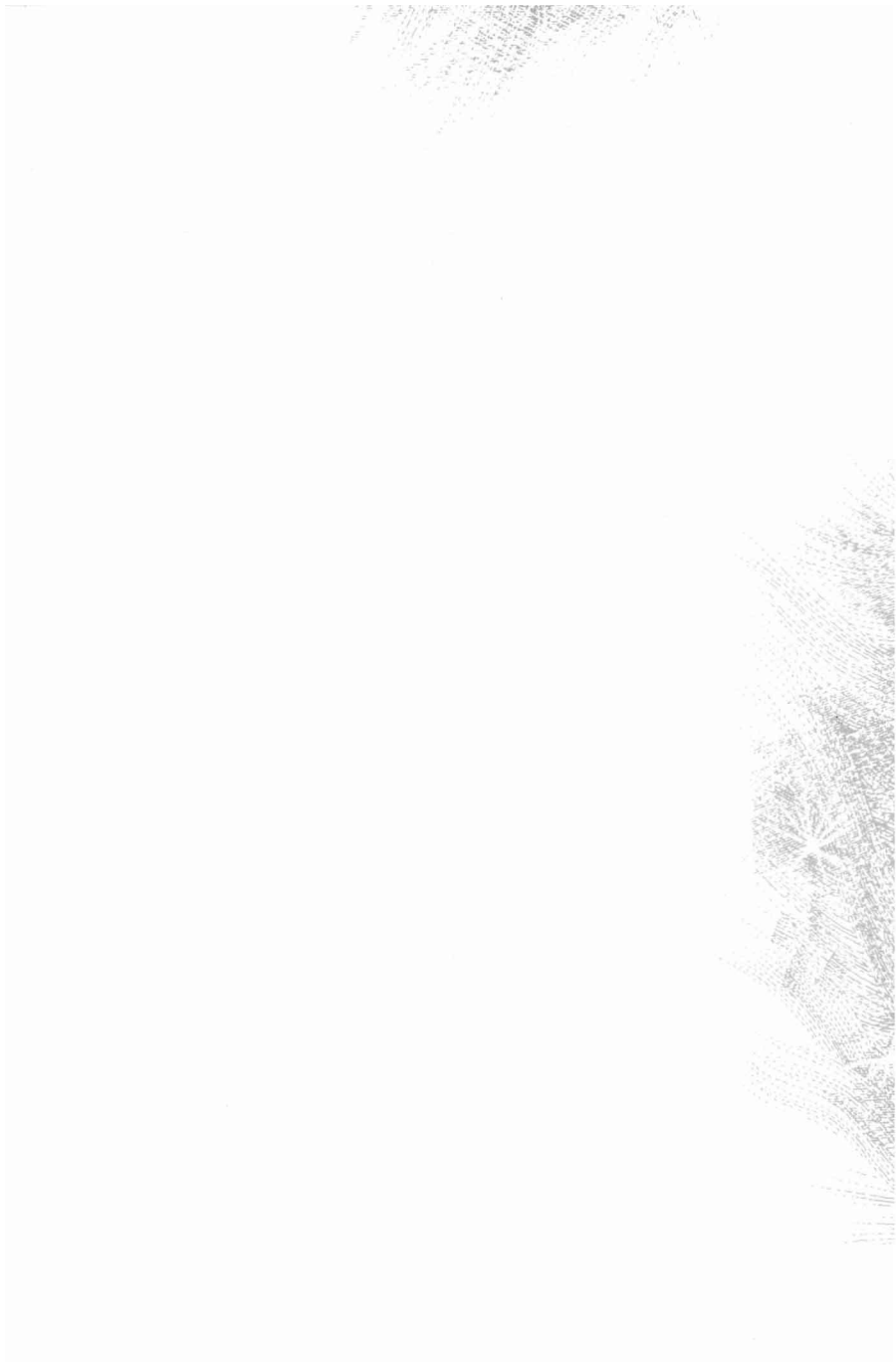
154———Ⅶ—危険な家

159	Ⅷ—媒酌人
165	Ⅸ—ロゼッタの園
172	第二部—女奴隷たち
172	Ⅰ—日の出
175	Ⅱ—ムッシュ・ジャン
180	Ⅲ—ホワール
183	Ⅳ—ハヌム
186	Ⅴ—フランス領事訪問
193	Ⅵ—デルヴィシュ
197	Ⅶ—煩わしき冢事
199	Ⅷ—ジェラブの奴隷宿
205	Ⅸ—カイロの劇場
207	Ⅹ—理髪師の店
210	Ⅺ—メッカ帰りの隊商
217	Ⅻ—アブドⅡエルⅡケリム
220	Ⅼ—ジャワ娘
226	第三部—ハーレム
226	Ⅰ—過去と未来
230	Ⅱ—ハムシーンの季節の日々
233	Ⅲ—世帯の苦勞

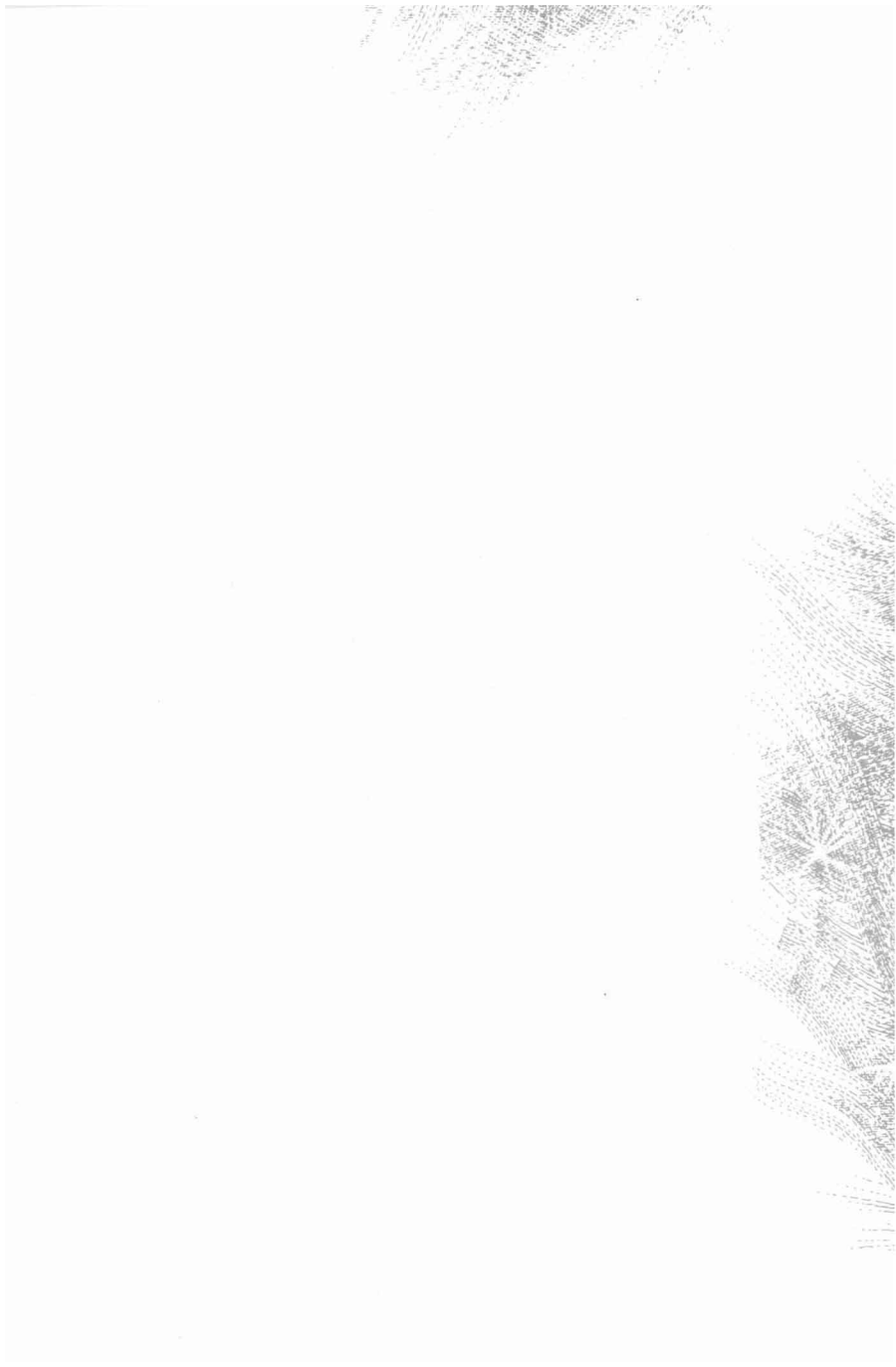
239	IV—アラブ語事始め
242	V—美しい通訳
245	VI—ロッダ島
256	VII—副王のハーレム
260	VIII—ハーレムの謎
263	IX—フランス語のレッスン
267	X—シューブラ
270	XI—魔神
276	第四部—ピラミッド
276	I—登攀
279	II—展望台
286	III—試験
296	第五部—川舟
296	I—舟旅の準備
300	II—家族の祝宴
304	III—割礼者
308	IV—シラフエ
311	V—石の森
318	VI—隔離食

326	第六部—サンタールバルバラ号
326	Ⅰ—道づれ
331	Ⅱ—マンジラー湖
334	Ⅲ—ボンバルド船
337	Ⅳ—海行かば
342	Ⅴ—牧歌
346	Ⅵ—航海日誌
350	Ⅶ—事件
355	Ⅷ—脅迫
360	Ⅸ—パレスチナの岸辺
363	Ⅹ—検疫隔離
370	第七部—山並み
370	Ⅰ—ブランシェ神父
376	Ⅱ—昼寝(キエフ)
380	Ⅲ—午餐
385	Ⅳ—パシヤの宮殿
390	Ⅴ—パザールと港
395	Ⅵ—サントンの墓

以下下巻に続く



東方の旅——上



ある友への序章——東方へ

I——ジュネーヴ街道

十一月のさなかにバリを發った旅行者の遍歴、そんなものがきみ(版によっては読者一般をさす人称を用いる)のたいなる興味をそそるかどうか。不運つづきで、さえない繰り言ばかり。描写をしようとしてもたいしたものはない。景色も暗くとぎされている。出發前に書いておいた三、四片のスイスやイタリアの風景など、まるで使いものにならない。海についてのメランコリックな夢想、湖についての漠たる詩情、山岳風景の習作、そして、バリのブルジョワたちにモントリユやモンモランシーより遠くには行けないことを嘆かせるべき陽光うらかな国々の詩的な花の数々、それらも同様である。

ムラン、モントロー、ジョワニーを過ぎてオクセル(パリ南方一七〇キロの町)で夕食になる。そこまでとくに面白いこともない。それでもこの旅行者の軽率さを考えても見てくれ。なにしろ、ほとんどまっ直ぐな鉄道があるのに、それでは退屈だとばかり、乗合馬車と運命をともしたのだが、これがたいしては満員だし、それも、あしたにでもならなければ来ないかもしれないというしろものだ！ この大胆不敵な旅人(原文は「結社員」の意にもなる仲間)は、盛りだくさんな料理を前にすると、そこまで運んでくれたヘラフィット&カイヤール乗合会社(当時有数の旅客運送会社の一つ)の特急馬車の出發にもあわてずさわがず、夕食を半分も食べないうちにまた馬車に乗りこんだほかの乗客たちの不幸を憫笑しつつ、盃を傾ける。相伴をするのは、まだ一時間やそこらは食堂にねばっている常連の泊まり客三、四人。そればかりか、その思いつきに一人悦に入って、街の見どころなどを問いあわせ、最後はビュリダン(デュマ作「ネールの塔」)を演ずるオーギュストの初舞台を眺めにいく始末、これは劇場に改装した教会の内陣での上演。

翌日、わが主人公はとんでもない時間に目を覚ました。二日分眠りこんでのことだからヘジエネラル急行は